編集後記

▼久保　健氏からこの『答申』を紙背に徹して読むことを学びました。答申のいう体力像のあいまいさ、親たちの労働生活の激変のところから深くさぐらない体力低下論、国や自治体の公的財源の支出の回避の追及等です。

▼関　春南氏から「スポーツは権利」であるという国際的なスポーツ観の歴史と日本政府のおくれた対応ぶりを学びました。氏の『戦後日本のスポーツ政策』（大修館書店）で、その詳細が論じられています。ぜひお読み下さい。

▼山崎氏は新潟の子どもの就寝時間が年々遅くなり、たくさんの習い事で多忙化していることを報告し、ＷＨＯ提唱の「生き生きとした生活」を取り戻す必要性を提起しています。

▼県教委の取組を紹介しました。体格は全国上位にある新潟の子たちの「からだ」の内実を保障するために、学校教育、地域スポーツまた競技者育成を受け持つ三つの部門の持続的連携の体制づくりが急務だと思いました。

▼文科省の矢継ぎ早の「教育改革」に重ねての今次『答申』への対応策。その提示にとまどう現場の声です。小中高での受け止めの違いは子どもや教師のおかれている状況の差でしょうか。

▼村山岱氏から競技スポーツを科学が支える歩みがシステムとして新潟県で始まったことを聞きました。画期的です。一度ビッグスワン内の医科学センターの見学をお勧めします。

▼「健康のため、中高年ほどスポーツ志向」の記事が新潟日報紙（六月七日夕刊）に出ました。本号の「中高年の健康とスポーツ」欄の人たちもみな健康のためのスポーツ人生を積極的に創っています。

▼近藤明彦氏が報告された県民の「教育基本法改正」公聴会の意見書はみな教育の国家統制に厳しい批判を寄せてます。ぜひ御一読を。

▼酢山省三氏の呼びかけの「ハンセン病問題を知る会」が県下で次々とひらかれることにお力添えを！　編集部からもお願いします。

▼県植物園園長松山雄二氏から秋葉丘陵につくられたこの植物園が目指す新しい植物園像を描いていただきました。この丘陵をフィールドに、県民参加の多様な今後の活動が期待されます。

▼高木伸二氏の「酒場」で年輪を重ねた男たちがしっとりと哲学を語る姿を想像しました。これまでの生きてきた意味が放送大学での学びの中で見えてくるのですね。

▼立石由美氏からいつも新鮮な感覚でとらえた北欧の環境教育の実情を伝えて頂いています。今回は中欧チェコの音楽や教育事情がつけ加わりました。

▼この企画でできなかった勝敗主義の中にある部活問題（編集長の論稿の後半は部活問題の予備提起にもなるでしょうか）、子どもたちの心身の健康問題、学校五日制の中の子どもの遊び・スポーツ、それらについての子どもたちの意見等々は順次とりくみます。

（本田）

にいがたの教育情報　NO.74

2003年７月15日発行

編集・発行　にいがた県民教育研究所

発行人　長崎　明

〒951-8116 新潟市東中通１－86 山崎ビル

電話・FAX(025)228－2924

振替口座・00640－0－12332

印刷所・中央印刷さぁびす

本誌内容の無断転載を禁じます。